

「日本の誇り、ナショナルプライドだ」

SACLA(さくら、兵庫県佐用町)の稼働まで1カ月に迫った2月6日。姫路で開かれた記念式典で、開発に携わった理化学研究所(理研)の理事長、野依良治(73)＝芦屋市出身＝は胸を張った。

さくらに隣接する「スプリング8」が誕生したのは、1997年10月。学術や産業で数々の成果を挙げた放射光の性能は今も世界最高レベルだが、この時、アメリカとドイツでは、次世代の光

夢の光始動

X線自由電子レーザー施設SACLA

上

に向けた計画が動きだした。500社の総力が、出遅れず。同社三原製作所主任技術師の三浦禎雄(47)は、窮地を救ったのは新たな北村は「ものづくりの基本で培った『技術の体頂だ。世界一の技術をコンパクトで安上がりに仕上げる。韓国やスイスなど後から追う国々が注目するのは、日本の技術だ。」

電子を光速に近い速度まで引き上げる「加速器」の實現。直後に製造は予定より3カ月前倒し。欧州を追い抜き、その3カ月後には、光の波長でも一足先に完成した。さくらの建設費は39億円、施設の全長0.7キロ。対して欧米は、100億円3・4キロ、490億円4キロ。見劣り

世界一へ「技術立国」の真骨頂

の開發を指名されたのは、秀才そろいの理研で計算もし直したが、半年たっても解決の糸口は見えなかった。理研の北村英男(64)は、誤差千分の1という精度で、施設の心臓部「アンジュレーター」を手掛けた。学生のころ工作機械室に通い、工員から旋盤加工のコツを習った。見劣り

味を誰より知る野依は、工業だった。しかし、出足からつま精神的にも追い詰められ

4面に「さくら」の解説特集

(古根川淳也)